

二松學舎大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
早稲田大学中国古籍文化研究所 共催

「漢学者記念館会議」

予稿集

日 時：平成29年7月29日（土）10：00～16：00
会 場：二松學舎大学九段キャンパス1号館
2階201教室・11階会議室

「漢学者記念館会議」

－ 開催趣旨 －

日本学を含む東アジアの人文諸学の研究動向に鑑みるとき、「近代の漢学」はいまだ十分に研究対象となったことがなく、間違いなく従来 of 欠を補う重要な課題である。弘道館・足利学校・閑谷学校・咸宜園が「近世日本の教育遺産」として文化庁の「日本遺産」に認定されたことは記憶に新しいが、こうした藩校・郷学などの大規模な史跡だけでなく、日本全国には人材育成・地域発展に尽くした近世～近代の儒者・漢学者の業績を今に伝える記念館が数多く存在している。

記念館が厳しい状況に置かれていると予想される今こそ、漢学者記念館の学芸員・関係者にひろく呼び掛けて各組織の情報の共有化と各種連携を促し、今後取り組むべき課題について討議し、また「漢学」に対する認識を新たにするとともに、社会に広くその意義をうたえる機会としたい。

二松學舎大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業研究代表者
町 泉寿郎

ースケジュールー

第一部：講演会

会場：201教室（10：00～11：55）

- 10:00～10:05 開会挨拶 二松學舎大学文学部 教授、文学部長 江藤 茂博
- 10:05～10:20 趣旨説明 二松學舎大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 研究代表者 町 泉寿郎
- 10:20～11:05 基調講演 「書院と私塾の発展——中国・韓国・日本」 関西大学 教授 吾妻 重二
- 11:05～11:30 講演Ⅰ 「成島柳北の漢学」 ブランダイス大学 准教授 マシュー・フレアリ
- 11:30～11:55 講演Ⅱ 「地理学者志賀重昂の漢詩
——テキサス州のアラモ遺跡に立つ漢文「記念碑」に触れて考えたこと」
早稲田大学文学学術院 教授 稲畑 耕一郎

ー 昼食休憩 ー

第二部：「漢学者記念館の現状と課題」

会場：11階会議室（13：30～16：00）

SRF事業による漢学塾関連資料調査の報告

- 13:30～13:40 「漢学・漢学者・漢学塾に関する持続可能なコンソーシアムづくりをめざして」
二松學舎大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 研究代表者 町 泉寿郎
- 13:40～13:50 「教学研究班による訪問調査の事例報告—成田高等学校を中心に」
二松學舎大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 研究助手 平崎 真右

各記念館からの報告

- 13:50～14:00 「安積良斎記念館の現状と課題」
安藤 智重（安積良斎記念館）
- 14:00～14:10 「芦東山と芦東山記念館の現状・課題」
張 基善（蘆東山記念館）
- 14:10～14:20 「『興譲館』（岡山）四度目の経営危機の中で平成の学校改革」
小谷 彰吾（興譲館）
- 14:20～14:30 「廣瀬淡窓と私塾咸宜園—官民協働の顕彰活動について」
吉田 博嗣（広瀬淡窓・咸宜園教育研究センター）
- 14:30～14:40 「泊園記念会について」
吾妻 重二（泊園記念会）
- 14:40～14:50 「ふるさと歴史館から偉人特化館へ「宮崎市安井息軒記念館」の現状と課題」
諸岩 則俊（安井息軒記念館）
- 14:50～15:00 「山田方谷の記念館について」
野島 透（山田方谷六代目直系子孫）
- 15:00～15:15 休憩
- 15:15～15:55 全体会議 司会 町 泉寿郎
- 15:55～16:00 閉会挨拶 学校法人 二松學舎 顧問、一般社団法人 漢字文化振興協会 会長 石川 忠久

発表タイトル	書院と私塾の発展——中国・韓国・日本
発表者氏名	吾妻 重二
所属・職位	関西大学 教授

近世の中国においては、それまでとは異なる新たな文化事象が数多く現われた。貴族階級の没落と庶民階級の勃興、科挙制度の整備、新興士大夫（文人官僚）の活躍、それに伴う儒教の復興、文体としての「古文」の定着、印刷術の発展と刊本の普及などはいずれもそうである。

ここにとりあげる書院・私塾（すなわち民間の教育施設）もまた、そうした新たな事象と関係をもちつつ、近世史の大きなうねりの中で発展した¹。

注意すべきは、この中国の書院・私塾が周囲の東アジア諸国に強い刺激と影響を与え、各国における民間教育の発達を促したことである。韓国・日本・ベトナムの近世において民間の教育施設が広く設けられ、各国の教育と伝統的教養の形成を促したのである。書院・私塾の果たした役割は東アジア世界においてきわめて大きいといわなければならない。

もっとも、各国によってその展開の仕方は違うようである。当初、中国と朝鮮・韓国では新鮮な先進性であふれていた書院・私塾の活力は、近世後期に至って次第に失われたように見える。科挙制度の膠着化と国家による厳しい言論統制がその大きな要因と考えられる。

一方、日本の場合を見ると、江戸時代、私塾は独自の発展を遂げた。その大部分が中国の古典を教える漢学塾であったことは他の国々と同じだが、しかし朱子学、陽明学、古学（仁斎学、徂徠学）、考証学など、さまざまな学派による学問所が栄えたことは他の東アジア諸国にはない特色であり、それは19世紀の江戸後期において著しい。そして、そのような19世紀における私塾の発展は、昌平坂学問所や藩校、郷校など官立系の学問所、および手習所・寺子屋の普及・発展とともに、日本における近代社会の推進に大きく寄与したといえる。

I 中国

東アジアにおける民間の学校の起源として重要なのは、紀元前6世紀末頃、中国の孔子（552-479）が曲阜（現：山東省）に設けた学問所である。孔子はここで三千人ともいわれる弟子を育てた。その成立は古代ギリシャに設けられたプラトンのアカデミアより百数十年早い。東アジア世界における学問施設の黎明は西欧世界よりも早いということがまず注目される。

その後、中国では学問所が継続して設けられた。しかし、漢代以降、唐代まで（前3世紀末～後10世紀）、すなわち古代および中世において学校教育の対象は一部の上層階級・貴族階級に限られていたといつてよい。そのような閉鎖性が破られたのは宋代、すなわち10世紀後半以後のことである。士人と呼ばれる新知識人階級の勃興とあいまって「書院」といわれる学問所が林立したのである。

書院は10世紀の白鹿洞書院（現：江西省）、岳麓書院（現：湖南省）を嚆矢とする。以後、書院は民間の自由な教育施設として発展する。しかも重要なことは、儒教および朱子学の伝播とあいまって同様の施設が韓国やベトナム、日本にも作られていったことである。とりわけ朱熹が復興した白鹿洞書院は以後、東アジアにおける書院のモデルとなった。朱熹（1130-1200）の「白鹿洞書院揭示」（「白鹿洞書院学規」は誤り。『朱文公文集』巻74）も、学生教育のモットーとして広く受容される。東アジアの近世東アジア文化を特徴づける要素の一つが民間講学（書院・私塾）の発達にあるというゆえんである。

孔子を祭る釈奠も、これらの学問所においてしばしば行なわれた。

ただし、その後の発展には違いが見られる。以下、各国の状況を見てみよう。

Ⅱ 東アジアにおける民間の講学・教育施設

近世東アジア地域における民間の講学施設をざっと整理すると次の図のようになる。

民間の講学施設

	日 本	中 国	朝 鮮	ベトナム
講学・研究（高次）	私塾	書院shūyuàn	書院 서원	未発達
初等教育（低次）	手習所 (寺子屋)	私塾sīshú	書堂 서당	LỚP ÔNG ĐỒ (漢文の教室)

ここで注意すべきことはさしあたり次の点である。

1) 中国・韓国・ベトナム・日本では、呼び名こそ異なれ、いずれも民間の講学施設が発達した。それは高次の講学・研究を行なう施設と、低次の初等教育（読み書きなど）を担う施設に分けることができる。

2) 日本の場合、書院という呼称はあまり用いられなかった。「書院造り」や武士・大名の表座敷を表わす「書院」と混同するのを避けたためであろう。

3) 私塾は中国では一般に低次の初等教育施設を指すが（家塾、義塾など）、日本では必ずしもそうではない。林羅山の林家学塾、伊藤仁斎の古義堂、山崎闇斎の闇斎塾、荻生徂徠の護国塾、広瀬淡窓の咸宜園、藤澤東咳の泊園塾など、いずれも私塾であるが、官立学校をしのぐ高い学術水準を誇った。日本の場合私塾は、規模はともあれ、中国や朝鮮の書院に相当する高レベルの教学をも含む講学施設であった。

4) ただし、日本の私塾は一般に規模が小さく、塾主の自由な裁量のもとに運営された。したがって塾主が死去すると、塾は多くの場合閉じられてしまう。政府の庇護を受けた私塾もほとんどない。これは日本の私塾がプライベートな性格が強かったからである。

5) ここに挙げたのは民間の講学・教育施設であるが、これ以外に官立学校が設けられていたことはいうまでもない。ただし、日本を除けば、その活動が民間の場合に比べると見劣りするの否めない²。

Ⅲ 中国・韓国・ベトナム

中国の場合、宋代から清代にかけて（10世紀～20世紀初頭）、八千あまりの書院が建てられたとされるが、これは容易ならぬ数である。宋代においては朱熹や陸九淵（1139-1192）らが民間で盛んに講学を進めた。彼らは教育に情熱を傾け、多くの弟子を育て、学派を作る。また明代、16世紀初頭の王守仁（王陽明、1472-1528）や湛若水（1466-1560）および彼らの門人が作った書院も、国家教学から自由な学問所として、士大夫から庶民階層を含む幅広い階級から熱狂的支持を集めた。

新しい学問には新しい教育・講学施設が生まれる。朱熹の『朱子語類』にしても王陽明の『伝習録』にしても活き活きとした対話に満ちている。ここには自由な撥刺とした精神が横溢している³。

しかし、長い歴史をたどるうち、中国の書院は次第に官学化していく。科举制度の浸透がそれに拍車をかけた。清

代（17世紀以降）になると、書院は国家の保護と介入ともあいまって大規模化するが、科挙受験のための予備学校という性格も強くなった。

韓国（朝鮮王朝）では官立学校の中心として首都に成均館が建てられたが、書院は中国に600年ほど遅れる16世紀半ば、朱子学の影響を受けて建てられた。安東地方の白雲洞書院（現在の紹修書院）がそれである。中国と同じく、民間の学問所として書院が作られたのである。陶山書院や屏山書院はその代表的なものである。書院は公的記録によるだけでも全国に370余カ所にのぼった。

しかし、韓国の書院は当初の開放性を次第に閉ざしていったように思われる。その理由は科挙制度が書院教育にも波及したこと、「門中」と呼ばれる一族のまとまりがみずからの祖先を書院で祀り、書院を私物化するようになったことにある。さらに1871年、中央政府の方針により書院は47カ所に限られてしまった。ここでも国家の厳しい統制がはたらいたのである。

ベトナム（黎朝以降）において、漢学を教える官立学校は設けられたが、民間の書院はあまり発展しなかった。もちろん私塾や家塾のような小さな教育機関は各地に作られ、主に漢字や漢文を教える塾であった⁴。

IV 日本の場合

では、日本においてはどうかだったのであろうか。教育施設が広く普及したのは江戸時代になってからであり、初期の林羅山の家塾（のちの昌平坂学問所）も「中華の先儒の書院文房」を模範として建てられた。私塾は、当初は京都や大阪、江戸などの大都市に限られていたが、19世紀以降全国各地に設けられ、わかっているだけでも千三百校あまりにのぼる。そして、その大半は漢学を教える漢学塾であった。

もう一つ注目されるのは日本の藩校である。藩校は官立学校であるが、日本には科挙がなく、したがって統一的国家教学もなかったため、経営は藩の自由な裁量に任されていた。藩校の設立は名古屋藩、岡山藩あたりが最も早い。岡山の閑谷学校は藩立の初期庶民学校としてよく知られている。その後、藩校は享保・寛政・天保年間に多く開設された。その掉尾を飾るのが水戸藩の弘道館である。

このように見てくると、日本の江戸時代における教育施設の東アジア的特色がわかる。

1) 開放性：これは地域を超えて各地から学生が集まったこと、武士や商人、農民などの身分を超えて学びに来たことに表われている。地域的にも階層的にも一定の開放性があったことになる。

2) 自由度：日本には中国や韓国、ベトナムのように科挙制度がなく、国家教学なるものが存在しなかった。いいかえれば幕府を批判しない限り幕藩当局は教育に口出しせず、人々はかなり自由に学問を講じることができた。よって私塾や藩校は、それぞれの方針のもとにさまざまなタイプの教育施設となった。

3) 近代化との関係：私塾や藩校で漢学その他を学んだ教養が近代化への基礎を作った。私塾・藩校出身者が明治期における日本の近代化に貢献したことは数多くの事例が示している。これに対して、中国や韓国の書院の多くは保守的傾向を保っていたように見える。

4) 礼儀・マナーの習得：そもそも儒教は礼儀を重んじる。日本人が礼儀を重んじることはよく知られるが、それは江戸時代における、こうしたさまざまな学校での教育と無縁ではあるまい。礼が人間と禽獣、文明と野蛮を区別するものという儒教・朱子学の考え方は日本にも伝わっていた（貝原益軒など）。

注：

¹ 中国の近世とその新たな文化事象については、湯淺邦弘編『概説 中国思想史』ミネルヴァ書房、2010年）第五章の「宋代」部分において整理したので参照されたい。なお、ここでの「近世」とは西洋との頻繁な接触を特色とする「近代」の直前、比較的長期にわたって社会体制が持続した時代をいい、中国では宋代（10世紀）以降、朝鮮・韓国では朝鮮王朝後期（17世紀以降）、ベトナムでは黎朝（15世紀）以降、日本では江戸時代（17世紀以降）を指している。

² 以上、吾妻重二「東アジアの書院について——研究の視点と展望」（『東アジア文化交渉研究』別冊2、関西大学文化交渉学教育研究拠点、2008年6月）、同「文化交渉と日本の私塾および泊園書院」（『東アジア文化交渉研究』第5号、関西大学文化交渉学教育研究拠点、2012年2月）を参照。

³ 以下、書院が開設当初、いかに清新で真摯な精神に支えられていたかを示す資料を挙げる。

朱熹（1130-1200）の場合：

- ・甲寅八月三日、蓋卿以書見先生於長沙郡齋。請隨諸生遇晚聽講、是晚請教者七十余人。（『朱子語類』卷116・第15条）
- ・榦自見熹、夜不設榻、不解帶、少倦則微坐、一倚或至達曙。熹語人曰、「直卿志堅思苦、與之處甚有益」。（『宋史』卷430、黃榦伝）

また『朱子語類』140巻はいわゆる「語録」のジャンルのうちで最大の分量をもつ。その膨大さ、話題の豊富さ、学的水準の高さ、さらにはこれだけの内容を門人たちがいちいち記録に書きとどめたことなどから、書院における朱熹の講学・教育がいかに盛大だったかを知ることができる。

陸九淵（1139-1192）の場合：

- ・淳熙十五年戊申、先生五十歳、在山間精舍。……易應天山名為象山、學徒結廬。先生既居精舍、又得勝處為方丈、及部勒群山閣、又作圓庵、學徒各來結廬、相與講習。與姪孫濬書云、「山間近來結廬者甚衆、諸生始聚糧相迎、今方丈前又成一閣、部勒群山、氣象亦偉」云云。……五月、郡縣禮樂之士、時相謁訪、喜聞其化、故四方學徒大集。……諸生登方丈請誨、和氣可掬、隨其入有所開發、或教以涵養、或曉以讀書之方、未嘗及閑話、亦未嘗令看先儒語錄。每講說痛快、則願傳季魯曰、「豈不快哉」……先生大率二月登山、九月末治歸、中間亦往來無定。居山五年、閱其簿、來見者踰數千人。（「年譜」、『象山先生全集』卷36）

王守仁（1472-1528）の場合：

- ・（正徳）十有三年戊寅、先生四十七、在贛。……九月、脩濂溪書院。四方學者輻輳、始寓射圃、至不能容、乃脩濂溪書院居之。（「年譜」、『王文成公全書』卷32）
- ・（嘉靖）三年甲申、先生五十三、在越。正月……於是闢稽山書院、聚八邑彥士、身率講習以督之、於是蕭璆・楊汝榮・楊紹芳等來自湖廣、楊仕鳴・薛宗鑑・黃夢星等來自廣東、王良・孟源・周衝等來自直隸、何秦・黃弘綱等來自南贛、劉邦采・劉文敏等來自安福、魏良政・魏良器等來自新建、曾忭來自泰和。宮剝卑隘、至不能容。蓋環坐而聽者三百餘人。

⁴ 以上、吾妻重二編『泊園記念会 創立50周年 記念論文集』（関西大学出版部、2011年）所収の諸論文を参照。

発表タイトル	成島柳北の漢学
発表者氏名	マシュー・フレーリ
所属・職位	ブランダイス大学 准教授

明治初期の草分け的なジャーナリストとして活躍した成島柳北（一八三七～一八八四）は、奥儒者として勤めた成島家の八代目にあたる。成島家は、始祖道雪（一六世紀末生まれ）より江戸で徳川幕府に奉仕した家柄で、三代目の錦江（一六八九～一七六〇）の時から、代々将軍の教育に直接携わる儒官となった。柳北は、奥儒者の役職に就くために、幼少より祖父司直（一七七八～一八六二）及び父稼堂（一八〇二～一八五三）のもとで儒学經典を孜々として学び、彼らが『徳川実紀』と『後鑑』をそれぞれ編纂していたところを身近で見て、後にその校閲を命じられた。

嘉永三年（一八五〇）頃、米欧の汽船が日本近海に出没していたことを受けて稼堂は、「以古照今」のために和漢韓の史書を博搜し「外寇」に関する記述を『海警録』として纏めたが、若き柳北も父と同じく憂国の念を抱き、ペリーが再び日本に来航した安政元年（一八五四）には、外患を強く危惧したことが、漢文体日記『硯北日録』の記述や漢詩作品から窺える。しかし日本の置かれている状況を鑑みて、家業である学問に対して焦りや懐疑も持っていたようで、当時の詩作には幕府から積極的な役割を与えられなかったことに対する不満も散見する。

憂国の情に燃えていた青年柳北は、洋学を否定する詩を何首も作っていたが、万延・文久頃になると西洋に対する好奇心が芽生え、膨らんでいった。大槻磐溪、桂川甫周、柳川春三といった洋学者との交流が重要な要因だったが、自らの古銭収集趣味がこの変化に大きく寄与していたことは、自覚もし、また、同時代の福沢諭吉にも指摘されていた。

柳北が自ら作った西洋のコイン・アルバム『海外貨幣小譜 初編』（静嘉堂文庫蔵）は、幕末期の柳北の世界観がどのように変わったかを物語る。五巻からなるアルバムだが、ヨーロッパ諸国、北南米、ロシア・インド・オーストラリアなどの硬貨二百件以上を詳しく紹介している。一つ一つの表、裏を写影して、重さ、日付、銘字などを詳しく解説する内容である。柳北が本格的に英語を勉強し始めたのは文久三年以降だが、世界地理を把握するのに徐繼畲「瀛環志略」を始め、清から日本に伝わった地誌及び、日本で作られた世界地誌書を活用した。

この『海外貨幣小譜』が完成する頃に將軍侍講の職を解かれ閉門を命じられた柳北は、これ以降、奥儒者の役職に復帰することはなかった。しかし維新後も漢学を教え続け、また、ようやく維新後の居場所を新聞界に見出した後、漢学の素養がその成功の重要な要因にもなった。

『朝野新聞』の初代局長となった柳北が当初から設けた「雑話」（後に「雑録」）コラムは、特に人気を博した。内容は、主に自ら書いた漢文訓読調のエッセイであるが、自作も含めて当時の漢詩壇で活躍していた詩人の作を幅広く紹介したり、読者の作品を載せたりした。実用に傾倒する洋学一辺倒だった時代に、柳北は文学の価値を強調した。森春濤の『新文詩』（八年七月発刊）、佐田白茅の『明治詩文』（九年十二月発刊）等、漢詩文雑誌が続々と現れる以前に、『朝野新聞』はいち早くこの分野を開拓して、全国の漢詩人に新しい交流の場を与えた。

政府は明治黎明期を通じて新聞社を様々に援助してきたにも拘わらず、八年六月末には新聞紙条例及び讒謗律を發布し、弾圧し始めた。当時の新聞各紙には、真正面から新法律の不当を生真面目に論じた文章が数多く載っていたのに対して、柳北が『朝野新聞』紙上で発表した文章は、漢学の深い造詣を発揮して様々な修辭を凝らしながら、間接的に明治政府の政策を批判することが特徴だった。

新聞人を勤めた十年間に柳北は、新聞という新メディアが草莽に属して政府から独立した機関として確立されることに貢献した。儒学を家学とする家に育った柳北は、幕臣としての任を果たしたが、維新後は野に下り、隠逸したかのような時期もあった。しかし、彼の生涯を貫いていたのは社会に積極的に関わる行動、国の現状や未来についての真剣な思索であった。

発表タイトル	地理学者志賀重昂の漢詩 ——テキサス州のアラモ遺跡に立つ漢文「記念碑」に触れて考えたこと
発表者氏名	稲畑 耕一郎
所属・職位	早稲田大学文学学術院 教授
志賀重昂（1863年—1927年）は、日本近代の地理学者であり、その主著『日本風景論』は地理学的な観点から日本の風景の特質とそれによって構成された風景の美を論じた書物である。同書は明治二十七年（1894年）に政教社から発売されると瞬く間にベストセラーとなり、日本人の従来風景観に大きな変化をもたらしただけでなく、とくにその愛読者となった若者たちの間に近代登山の気風を生み出した。しかも、この書は一時の人気に終わらず、その後、一世紀以上を経た今に至るまで版をさまざまに変えて出版され続けており、日本の景観を論じるに当たっては欠くことのできない書物となっている。近代日本の代表的な名著の一つと言える。 ところが、近年は、かつて名文と言われた行文そのものが“漢文訓読”の口調を残すことや本文の随所に江戸期の“漢文原文”がそのまま引用されていることなどから、読みにくい書物として敬して遠ざけられている感があるのはまことに惜しむべきである。 その《日本風景論》の著者である志賀重昂が百年余前にアメリカのテキサス州サンアントニオ（San Antonio）のアラモ（Alamo）要塞の跡に建てた漢文の「記念碑」がある。この石碑については、建立当時は現地テキサスで大いに話題になり、今も当時のままに大切に保存されているが、日本ではすっかり忘れ去られてしまっている。たまたま今春現地で見る機会があったことから、その建立の経緯を改めて紹介するとともに、東アジアの遙か「域外」に建つこの漢文碑の存在に触発されて考えたことをいささか述べてみたい。 一つは「忘れられた漢詩人」としての志賀重昂についてであり、また一つは「明治150年」この方の「漢文」の存在価値についてである。	

SRF事業による漢学塾関連資料調査の報告

発表タイトル	漢学・漢学者・漢学塾に関する 持続可能なコンソーシアムづくりをめざして
発表者氏名	町 泉寿郎
所属・職位	二松學舎大学 教授
大学をとりまく環境の変化 文学部不要論に象徴される人文学の危機は今なお続いている。高等教育改革では、COEプログラム等を通して教育研究の再編が進み（旧帝大による基礎研究、国公立大による地元還元型研究、私大は建学の精神を核とした研究）、旧帝大など拠点大学に補助金が集中する一方で、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業等の措置も講じられた。 近年の一般的な傾向として、施設の新設や大型研究プロジェクトの新たな採択は少なくなっており、大学共同利用研究機関にみられるような既存の組織・施設の強化や連携促進へと進んでいる。研究内容に関しては、「学際性」と「国際性」はなおも鍵詞であり、また世界の日本学の動向や中国における研究動向も刺激となって、研究教育資源としての「漢文」「漢学」への関心は向上している。 「漢学」は近代日本の歩みと歩調を合わせ正負両面を持ったが、今こそその両方を正面から見据えた研究が必要であり、そのためには東アジア諸国を始めとする国際的な連携協力が有効である。 地方創成と文化遺産 文化庁による「近世日本の教育遺産」「明治日本の産業遺産」といった取り組みが、世界遺産登録にも繋がったことは記憶に新しい。誰もが想起できるような有名施設がある一方で、全国に点在する孔子廟や漢学塾、また儒者・漢学者の遺構や資料の多くは危機的な状況に置かれている。日本の近代化を牽引しながらも、薩長史観、司馬史観では取り上げられず埋もれている人物はなお多く、特に昨今の漢文・漢学に対する一般的な知識の低下と相俟って、儒者・漢学者は忘却されてしまっているか、または自治体や民間組織など個々の奮闘努力によって辛うじて維持されている。儒者・漢学者と彼らが体現した漢学文化は、成熟社会に見合った観光資源として再評価するに足る価値と魅力をもつ。二松學舎大学でも倉敷市との協定締結以来、備中漢学資料室の開設や講演会の継続実施を行っている。 持続可能なコンソーシアムづくり 今回、共催の早稲田大学中国古籍文化研究所の稲畑耕一郎教授と諮って第一回「漢学者記念館会議」を開催したが、二松學舎大学のSRF事業は時限付きのものであり、会議の継続にはなお工夫が必要である。大学における漢学関係施設に関する研究蓄積には、関西大学・大阪大学・筑波大学・二松學舎大学等の活動があるが、個々の活動を繋げて活動の輪を広げ、社会的に影響のある活動に強化していく必要がある。その第一歩として、各研究者・各機関の現状と課題を共有し、自由に討議する機会としたい。	

SRF事業による漢学塾関連資料調査の報告

発表タイトル	教学研究班による訪問調査の事例報告―成田高等学校を中心に
発表者氏名	平崎 真右
所属・職位	SRF 研究助手

SRF教学研究班のテーマの一つとして、昨年度より藩校や漢学塾、女学校、洋学校、語学校などの主に「私塾（私学）」を前身とする教育機関（高等学校・大学等）の成立、および変遷等に関する研究を進めており、これまでのところ各教育機関に対するアンケート調査の実施を皮切りに、各学校史資料の交換寄贈や訪問調査等を順次実施している。近代における「漢学（漢文学）」の位置取りについて、教育史や学校史を俯瞰的に眺めつつ、各教育現場のなかでの具体的な扱われ方などの考察を通して相対的、立体的に検討していこうという狙いにもとづくものである。

アンケート調査の具体的な質問項目や実施件数、各回収率などの詳細については別紙資料（『雙松通説』vol.22、表①）に譲るが、これまでのところ凡そ3割程度の回答とともに、学校史関連資料の寄贈も（各機関・ご担当者様のご厚意により）比較的に多くを得ることができている（これまでに寄贈を受けた学校史関連資料の内訳と詳細については別紙資料（表②）を参照）。今後の課題として、寄贈を受けた史資料類の分析を進めるとともに、追加調査等も検討していく予定である。

この追加調査のうちには、各学校機関に対する訪問調査も含まれる。現在までのところ、フェリス女学院、桃山学院など、独立した資料収集・保存・研究機関を有する学校を中心とした訪問調査を数回程度実施しているが、本発表ではそのうちより、成田高等学校を事例とした調査報告を行いたい。

＊成田高等学校は、明治20（1887）年10月3日に創設された私塾「成田英漢義塾」に淵源をもつ。成田山新勝寺14代貫主・三池照鳳（1848－1896）により地域の教育振興が企図され、地域社会の協力を得て創設される。「英漢義塾」の名は、小倉良則（1848－1920、政治家・実業家）により明治17（1884）年に設立された「北総英漢義塾」を引き継いだもの。当初は前学期（9月～2月）、後学期（3月～7月）の2学期制を採り、入塾料は50銭、授業料は1か月50銭、その他塾費として1か月5銭を徴収。塾創立の趣旨、「地方子弟の実業に就かんと欲し、又諸官立ならびに専門学校等に入らんと欲する者の為に須要なる学科を教授する」（「成田英漢義塾概則」）にもとづき、当初は「英語・数学・漢学」を中心に教授し、その後次第に「経済・法律・植物」等の科目を増設、明治23（1890）年には規則改正により「倫理・漢学・英学・数学・科学・地理・歴史」の学科に再編成される。

その後、塾生の減少なども背景となり尋常中学校への移行が目指され、明治31（1898）年10月7日「成田尋常中学校」として設立認可を受ける。以後、明治32（1899）年4月1日「成田中学校」へ改称、明治41（1908）年2月21日「成田山女学校」設立、明治44（1911）年2月13日「成田山高等女学校」設置などに至る。

各記念館からの報告

発表タイトル	安積良斎記念館の現状と課題
発表者氏名	安藤 智重
所属・職位	安積良斎記念館設置者 安積国造神社 宮司
現状 当館は、地元の寝々塾という団体が市民に募財をし、安積国造神社会館4階の1室を改装して展示ケースを設置し、平成13年に開館した。福島県重要文化財の安積良斎門人帳をはじめとして、良斎やその師友門人の板本、写本、書翰、書幅等を展示している。 見学者は神社の社務所で申し出、神社職員が記念館に案内する。入館無料。平素は消灯施錠している。 ささやかながらも、館があるおかげで、全国から問い合わせなどがあり、良斎の師友門人や漢学関係の方々とのつながりもできた。新幹線郡山駅から近いので、何かのついでに立ち寄る方も多い。 漢学者の著作は皆漢文なので、なおさら世間から忘れ去られてゆく。漢文の著作を訳出し、現代の読者を得ることは重要な仕事である。今まで、良斎文略、良斎詩略、洋外紀略を訳し、明德出版社から出版した。今、遊豆紀勝 東省統録（紀行文）の訳出をしている。なお、平成15年から、斯文会の村山吉廣先生の講座を受講し、訳出には同先生のご指導を頂戴している。 安積歴史塾を設置、私が専務理事を務め、良斎をふくめた安積地方の歴史啓蒙のための市民講座を年八回ほど開催している。また、良斎先生に学ぶ会を置き、良斎の詩文から学ぶ場としている。 課題 啓蒙書を通じて若い層に訴えてゆく必要を感じている。訳注書の作成については、遊豆紀勝 東省統録を訳してひとまず休止する。漢学者の著作をまるごと読んでもらおうとしても、世間の反応が鈍い。 良斎書翰の読解を進める必要を感じている。しかし、翻字の技術の習得がなかなか進まない。 良斎の師友門人あるいは漢学全般まで広く見渡す必要を感じている。 良斎に連なる思想的系譜を作成した。漢学者の各館を、漢学者の関連図を作成してつなげてはいかがか。ともかく、漢学者のネットワークを構築して、漢学自体を盛り上げていく必要を感じている。 公式HPの拡充は有効だと思うが、時間的余裕がない。現状は神社のホームページに併記するのみで、更新も行っていない。ブログ安積良斎研究室で情報を発信しようと思ったが、滞りがちである。 漢学者の各館をミュージアム検索サイトに登録してはいかがか。	

各記念館からの報告

発表タイトル	芦東山と芦東山記念館の現状・課題
発表者氏名	張 基善 (チャン キソン)
所属・職位	宮城教育大学 非常勤講師
(1) 芦東山と『無刑録』 芦東山（あし・とうざん、元禄9～安永5）は、仙台藩磐井郡東山浜民村（現一関市大東町浜民）の村役人（肝入）の家に生まれた。幼い頃から学問に励み、仙台藩儒学者として第5代藩主伊達吉村に仕える。藩政に関する考えを上言（「七か条の上言」）し、元文2年（1737）には学問所の講堂座列に関する願書を出した結果、評定所より処罰され、元文3年（1738）から宝暦11年（1761）まで加美郡宮崎（現宮城県加美町）及び栗原郡高清水（現宮城県栗原市）にて幽閉生活を送ることとなった。百姓出身であった芦東山は、常に庶民・弱者の擁護を念頭に置いていて、幽閉中に記した『二十二か条の上言』などからは、人間愛と儒者としての信念を伺うことができる。 芦東山の主著は、中国歴代の刑法関連の記事をまとめ、自分の意見を加えた『無刑録』である。「刑本」から「濫縦」までの14編（18巻）の体制。この大著は、江戸幕府の儒官であった室鳩巢より編纂を依頼され、幽閉期間中に執筆された。人々を教化させ、刑罰の必要のない社会を作り出すのが刑法の役割だと主張したもので、近代的な刑法思想の先駆と評価される。明治10年（1877）元老院より初めて刊行された。 (2) 芦東山記念館の現状 芦東山に関する資料の保存は、芦家一族によってなされてきた。昭和57年（1982）、分家（屋号伊勢堂）の芦文八郎氏によって、私設の「芦東山先生記念館」が開設され、芦東山関連の資料が保存、公開されることとなった。その後、平成19年（2007）10月、一関市立の芦東山記念館（以下記念館）が開館し、現在に至っている。 記念館では常設展以外に、年3～4回の特別展と、5回の館長講座を行っている。昨年度の入館者総数は1,579名。特別展は、芦東山に関連するものや、地元に関する内容を多く取り込んだ展示を行っており、ワークショップでは「芦東山かるた」や紙芝居を使って、子供にも芦東山を知ってもらい取り組みを心がけている。 『原本無刑録』の国指定文化財化を目指し、市の事業として4年前から早稲田大学に委託し稲畑耕一郎教授に調査研究していただいている。また、芦東山関連の史資料調査・解説・目録作成等は、張基善氏に委託し平成23年から取り組んでいただいている。 記念館では、芦東山直筆の『原本無刑録』（岩手県指定文化財）、「芦東山書謙斎銘並叙」（一関市指定文化財）など芦東山関連の資料を多く所蔵している。芦東山関連資料の特徴としては、儒学関連の経伝釈義類が少なく（『玩易齋遺稿』所収分のみ）、長かった幽閉生活の影響もあり、書状の割合が高いことが挙げられる。芦東山が遣り取りした書状は、数千点に上ると推測されるが、個人宛に出されたもののため、発掘、調査が用意でない。しかし、芦東山の生活、心情、思想が分かる好い素材と考えられ、今後も地道な調査が必要である。 一方、芦東山については、1970年代より基本的な研究（水沢澄子1970など）がなされ、文学関連（稲畑耕一郎1983）などの広がりを見せているが、蓄積が多いとは言えない。『無刑録』関連（山下庫司1962、佐佐木英夫1963、桜井保之助1976、汪桂平1997、原田信2016、解2016）や芦東山の学問関連（劉玉才2016、王小林2016、町泉寿郎2016）は近年本格的な研究が始まっており、様々な切口によるさらなる研究が待たれる。	

各記念館からの報告

(3) 芦東山記念館の課題

課題① 資料調査と研究を充実させる

記念館の開館以来、寄贈・寄託や調査活動によって、埋もれていた資料が発掘・保存・公開されることとなった。今後も、芦東山関連の展示や教育普及活動の材料となる資料について基礎的な調査を行い、それに基づく研究を進展させる必要がある。

課題② 来館者数の増員を目指す

地元の人だけの集客には限界があり、他所からの来館者数を増やす必要がある。また、初めての来館者はもちろん、リピーターを増やすことが重要である。そのために、芦東山の思想をもっと分かり易くした展示の工夫や、芦東山の思想に関連した特別展の開催、周辺の関連施設（芦東山のお墓や生家、幽閉地など所縁のある施設・場所）を活用する動線が課題である。

課題③ 全国の漢学者記念館のネットワーク化等、全体で周知を図る

漢学者に興味を以て来館したお客様が、また別の記念館へ足を運ぶきっかけを作れる、共有のネットワークができれば、新たな思想の普及と集客の可能性も見えてくると考えられる。

各記念館からの報告

発表タイトル	「興譲館」(岡山)四度目の経営危機の中で平成の学校改革
発表者氏名	小谷 彰吾
所属・職位	二松學舎大学 非常勤講師 元興譲館高校校長
尊王攘夷に揺れる幕末期、多くの若者が夢を失い風紀が乱れていた備中一橋領(現岡山県井原市)で郡中の世話役、代官らが「教諭所」の立て直しを図る。その初代督学として招聘されたのが、後月郡梁瀬村に私塾「桜溪村塾」を開いていた儒者阪谷朗廬である。 1853(嘉永6)年10月1日、「一橋藩郷校江原教諭所」として再興。朗廬は、久敬舎時代から憧れを抱いていた「興譲館」としたかったものの、すでに全国に六ヶ所存在していたとされる「興譲館」に気兼ねして教諭所名でのスタートとなった。 同月23日、古賀塾久敬舎の同胞であり、師古賀侗庵の子、茶溪がプチャーチンとの交渉の為、長崎へと山陽道を西下。その機会に朗廬と茶溪が歓談。そこで茶溪が「興譲館」の文字を揮毫して朗廬の背中を押したことによって塾名が「興譲館」となる。 以降164年間、その経営を官に移さず、校名変更もなく、現在、「私立興譲館高等学校」として、当時と同じ場所でその歴史をつないでいる。 校名の由来は、1776(安永5)年、米沢藩主上杉鷹山が招聘した細井平洲命名の「米沢興譲館」と同じく、「一家仁なれば一国仁に興り、一家譲なれば一国譲に興り、一人貧^{たんはい}戻なれば一国乱^なを作す。」の四書『大学』の一節にあり、教育の柱は、中国南宋の時代、朱熹が五老峰の麓にある「白鹿洞書院」の再建にあたって、生徒が守るべき教えとして掲げた『白鹿洞書院揭示』である。 元治・慶応の頃には、山陽道を往来する全国の諸士たちが次々に海内の儒宗と謳われた阪谷朗廬の「興譲館」の門をたたき、水戸の弘道館、萩の明倫館とともに「天下三館」と呼ばれ、中備の文教を担った。日本資本主義の父と呼ばれる渋沢栄一との姻戚関係をはじめ歴史上に名を残す多くの人物と縁を結びながらも、その運営は資金面において開学当時から厳しいものであり、開学当初から現在で言う公債制度を考案。借入金を理解者の支援によって返済する方法によって維持継続している。 「興譲館」は、現在に至るまで三度の大きな経営危機を経た。 最初は、二代目館長坂田警軒の時代。岡山藩主池田光政によって開設された「閑谷学校」さえ衰退し、1870(明治3年)が閉鎖され、「学制」、「教育令」と続けざまに日本の教育基盤が大きく変更されたときである。多くの私塾が「公」へ移行する中で、「興譲館」は、「民」すなわち「私立」を堅持し、1874年には、「私立学校興譲館」となるものの、官給が途絶えるほど困窮した。 二度目の危機は、警軒が同志社に招聘された後を受けた三代目館長山下秋堂が同志社に招聘された頃。その後、留守教授となった二松学舎出身の奥田諫山の時代には、生徒数わずか30名となり、閉館瀬戸際の中、諫山は病に侵されたため、再び山下秋堂を同志社から戻して改革に着手。以降、国語科の増設、普通科の新設、後に商業学校、工業学校、また、財産制度を設けて経済的基礎を確立し回復。結果、生徒数数百人に回復している。 三度目の危機は、1936(昭和11)年頃から。1939(昭和14年)には、生徒が集まらず30名余り。そこで、朝鮮で先生をしている興譲館の出身者の協力を得て、釜山、仁川、木浦、京城の小学校を歴訪し約60名を募集。しかし、この策も大東亜戦突入後は途絶えた。こうした危機を教職員はもちろん、卒業生、地域の有志が「興譲館維持会」「興学会」「校友会」などの組織を設立し、募金を集めることで凌いできたのである。	

各記念館からの報告

旧制中学時代には優秀な生徒が多くいたものの、戦後は、同地域の公立学校が共学となり、進学実績を上げるとそれに反比例するように受け皿的存在となる。

昭和の後半から平成初期にかけて急速な少子高齢化傾向と産業の衰退によって、この二極化傾向が顕著になるとともに、低収入地域が少子化となるとほとんどが公立校志望であり全入である。つまり、「興譲館」を志望する生徒がいない四度目の危機である。

そこで、平成10年から、有志が結束。ボトムアップで学校改革に着手した。キャッチフレーズは、「先祖がえり」。漢学塾をルーツとする名門への原点回帰である。必修科目に学校設定科目『論語』を新設。その発展として「人間学」、さらに、「創造」(総合的な学習)の三つを教育課程のコアとして、伝承の校訓『白鹿洞書院揭示』の理解と実践を目指した。

また、郷学をルーツとする学校の役割と使命を現代に置き換え、学齢期を超えて地域と生徒の双方向の学びを展開する「地域連携・地域融合」の実践も成果を上げた。

その一つ「地域セミナー」は、幼児から高齢者まで漢字検定の合格を目指す講座や夏休みの朝、地域の小学生たちを指定史跡「講堂」(阪谷朗廬の書斎)に集め、『論語』の勉強を行うものである。また、「聴講コース」では、地域の高齢者層を中心に『論語』をはじめ、『四書』『五経』などを学び、自己の生き方を見つめる講座を展開した。

「先祖がえり」に向かう学校改革は、確実に生徒の姿の変容につながり、平成10年には年間100件を超えた訓育問題が平成27年には0となっている。また、進学実績の向上、野球部の甲子園出場をはじめ、各部活動の全国レベルでの活躍が実現した。因みに野球部の甲子園出場は、『論語』必修化の最初の学年であったため、『論語』学習が甲子園に導いたと報じたメディアもあったほどである。

しかし、加速する少子高齢化に加え、産業の衰退とともに低所得層は拡大、さらに2010(平成22)年から実施された公立高校無償化、県補助金制度の変更(標準運営費方式)などが逆風となって、経営は窮地に立たされている。

以上

各記念館からの報告

発表タイトル	廣瀬淡窓と私塾咸宜園－官民協働の顕彰活動について
発表者氏名	吉田 博嗣
所属・職位	日田市教育庁 咸宜園教育研究センター 研究・啓発係 主幹（総括）

廣瀬淡窓（淡窓は号。通称は求馬）は、天明2年（1782）、豊後国日田郡豆田町（現大分県日田市）の商家で廣瀬家の長男として生まれ、後に江戸時代後期を代表する教育者や漢詩人、そして儒学者として活躍した人物である。

廣瀬家は代々九州諸藩の御用達であると共に、幕府直轄地の日田において掛屋（公金取扱）も務めていた。淡窓は生来から病弱であったため、家督は弟の久兵衛に譲り、自身は儒学者、教育者としての道を歩んだ。幼い頃より『書経』などの素読を始め、10歳の頃には漢詩を盛んに作っていた。その後、14歳で豊後国佐伯藩（大分県佐伯市）の松下西洋のもとで最初の遊学を行い、17歳では筑前国の儒学者亀井南冥・昭陽の門下となったが病気を理由に二年余りで帰郷することになり、その後は京摂への遊学もかなわず、郷里で教育者としての道を歩むことになった。文化2年（1805）、24歳の時に豆田町の長福寺学寮において、人生初の塾経営を創めている。当初は塾名もなく、次の場所で開いた塾に初めて「成章舎」と名付けた。その後も暫くは定まった場所での塾経営ができず、本家土蔵で講義したこともあったが、文化5年に初めて塾舎を建築して「桂林園」（別名：桂林荘）なる塾を開いた。文化2年の開業から12年余りが経過した文化14年（1817）、淡窓36歳の時に現在の「咸宜園」の地に塾を移した。「咸宜」とは「咸く^{ことごと}宜し^{よろ}」という意味で『詩経』の一説に由来する。弘化元年（1844）には年間の入門者が136名を数え、また嘉永年間には在籍者が230名を超えるなど塾勢を極めた時期であり、江戸時代を代表する漢学塾とされた。淡窓は教育者としての50年余りの間に、3千名以上の門弟を教育し、安政3年（1856）に75歳でその生涯を閉じている。その後は門下生たちが塾を継承し、一時中断することもあったが明治30年（1897）まで存続した。現存する入門簿には4,797名の名前が記され、不明な門下生を含めると5千名以上が学んだ私塾であった。

入門者の内訳は全体の3分の1を僧侶が占めており、次に多いのは医家の子弟や医家を目指した青年たちであった。主な門下生には、大村益次郎（兵学者）や長三洲（官僚・書家）、岡研介（蘭学者。シーボルトの鳴滝塾塾頭）、大隈言道（歌人）、上野彦馬（写真技術家・坂本龍馬の写真撮影）等がいる。

以下、咸宜園教育の特色を整理すると次のようになる。

（1）「三奪の法」による平等主義、（2）「月旦評」による実力主義、（3）「職任制」による実学主義（学校の自治運営）、（4）詩作の奨励による情操教育、（5）放學や遊山（塾外活動）

廣瀬淡窓・咸宜園関係の略年表

天明2（1782）年 廣瀬淡窓が豊後国日田郡豆田町に生まれる

文化2（1805）年 3月淡窓が豆田町の長福寺学寮（本堂は重要文化財）で最初の塾を開く

文化4（1807）年 私塾「桂林園」を建築し

文化14（1817）年 塾は「成章舎」「桂林園」と移り変わり、現在地に私塾「咸宜園」を開く

明治6（1873）年 咸宜園東家側の講堂で「堀田学校（現：咸宜小学校の前身）」が開校

明治7（1874）年 4代目塾主の廣瀬林外死去により咸宜園は一時閉鎖される

明治12（1879）年 咸宜園出身者により私立学校「咸宜園」が再興される

明治23（1890）年 淡窓の蔵書散逸を防ぐため東塾（寮舎）を売却し書蔵庫（現存）を建設する

各記念館からの報告

- 明治30（1897）年 咸宜園が閉塾する
- 大正2（1913）年 廣瀬淡窓頌徳祭（生誕130年祭）が開催される（日田郡教育会）
- 大正5（1916）年 日田郡立淡窓図書館（日田郡教育会）が咸宜園跡に建設される
- 大正14（1925）年 70年忌祭の開催（日田郡教育会）、東京では清浦奎吾伯爵が発起人となり、華族会館にて式典を催す。『淡窓全集』（全3巻）が日田郡教育会により刊行
- 昭和7（1932）年 「咸宜園跡」が国の史跡となる
- 昭和23（1948）年 「廣瀬淡窓墓」（通称：長生園）が国の史跡となる
- 昭和27（1952）年 廣瀬淡窓を顕彰する「淡窓会」が設立。昭和28年の大水害で活動は一旦停止するが、翌年から本格始動。名誉会長には大分県知事、事務局は遠思楼内に置く。
- 昭和30（1955）年 淡窓先生100年祭（100回忌）が開催される（淡窓会主催）
- 昭和56（1981）年 廣瀬淡窓生誕200年記念式典（日田市主催）
- 昭和59（1984）年 廣瀬淡窓の旧宅を「廣瀬資料館」として開館
- 平成17（2005）年 廣瀬淡窓没後150年記念事業（大分県主催・日田市主催）
- 平成19（2007）年 公益財団法人廣瀬資料館となる
- 平成22（2010）年 咸宜園教育研究センター開館（史跡のガイダンス施設）
- 平成23（2011）年 市民応援団「咸宜園平成門下生之会」の発足
- 平成25（2013）年 「廣瀬淡窓旧宅及び墓」が国の史跡（追加指定）となる
- 平成27（2015）年 咸宜園跡や豆田町などが日本遺産に認定（茨城・栃木・岡山・大分県の連携）
- 平成29（2017）年 史跡「咸宜園跡」（西家側）の公有化完了
- 平成29（2017）年 2月「咸宜園開塾200年記念事業」がスタート（平成30年2月まで）

各記念館からの報告

発表タイトル	泊園記念会について
発表者氏名	吾妻 重二
所属・職位	関西大学 教授

江戸時代後期の文政8年（1825）、大阪に関西大学のルーツの一つとなる漢学塾——泊(はく)園(えん)書院が生まれました。泊園とは「さっぱりとした静かな心持ちで学問する学び舎」の意味です。当代の碩学(せきがく)といわれた藤澤(ふじさわ)東岐(とうがい)が開いたこの学問所は、その子の南岳(なんがく)、南岳の子の黄鵠(こうこく)・黄坡(こうは)、そして石濱純太郎へと受け継がれ、昭和23年（1948）に閉じられるまでの120余年の間に一万人を超える門人が教えを受けたといわれます。

江戸から明治・大正・昭和前期という、日本近世・近代の激動期を歩み続けた漢学塾はまれです。この間、泊園書院は有意な人材を数多く輩出し、大阪文化のみならず日本の近代化の発展に大きく寄与しました。

戦後、泊園書院の蔵書や自筆稿本、印章などのコレクションは関西大学に「泊園文庫」として寄贈され、その人文学やアジア学発展の礎(いしずえ)となりました。「泊園記念会」も関西大学東西学術研究所内に置かれて毎年記念講座が開かれています。

なにわに生まれた私塾泊園書院——関西大学はその志を今に受け継いでいます。

（パンフレット『泊園書院 なにわの学問所・関西大学のもう一つの源流』より）

参考：

- ・ 泊園記念会HP <http://www.db1.csac.kansai-u.ac.jp/hakuen/kinenkai/index.html>
 - ・ WEB泊園書院 <http://www.db1.csac.kansai-u.ac.jp/hakuen/index.html>
 - ・ 『泊園書院 なにわの学問所・関西大学のもう一つの源流』（関西大学泊園記念会、2016年） * 配布資料
 - ・ 『読売新聞』記事（2016年10月29日夕刊 関西版） * 配布資料
 - ・ 雑誌『泊園』（1962年より）
- * 最新号（56号）に、昨年の関西大学創立130周年記念事業にかかわるイベントを紹介する

以 上

各記念館からの報告

発表タイトル	ふるさと歴史館から偉人特化館へ 「宮崎市安井息軒記念館」の現状と課題
発表者氏名	諸岩 則俊（もろいわ のりとし）
所属・職位	NPO法人 安井息軒顕彰会 副理事長
（１）安井息軒記念館開館の経緯 4市町が合併した宮崎市には、4つの歴史施設があるが経営効率化のため見直しがあり、「きよたけ歴史館」は展示・収蔵を安井息軒にまつわる資料に特化し「安井息軒記念館」に改称され、この4月1日開館した。 （２）運営方法の変更 運営については宮崎市直営から民間委託になり、非公募で顕彰活動の実績がある「NPO法人安井息軒顕彰会」が委託を受けた。 （３）「安井息軒顕彰会」のあゆみと活動 清武町では文豪森鷗外の「安井夫人」が発表されたころから顕彰活動が始まり、「安井息軒顕彰会」は昭和50年（1975）に設立、40年に渡って顕彰活動をしている。現在は春の「息軒梅まつり」と9月23日の命日に開く「安井息軒記念講演会」を核に、記念館講座、みやざき息軒塾、夏休み子ども息軒塾、書道展、バスツアー、お佐代さんを偲ぶ会等々講座やイベントの顕彰活動をしている。 （４）運営方針 ・日本の近代化に貢献した「知の巨人」安井息軒先生の功績を調査・研究・学習する拠点。 ・息軒に関する展示の改善や資料充実をすすめ、地域へ学びの場の提供。 （５）事業費と運営スタッフ ・事業費 委託期間3年（5,000万円）・スタッフ4人（館長、学芸員1、嘱託、臨時職員） （６）課題 ・研究調査費の未計上（9割が管理費と人件費）、漢文解読の研究者不在（自筆本が解読難解） ・息軒関係の資料不足（安井息軒貴重書のマイクロフィルムは当館に収蔵） ・スタッフ不足（2，3人勤務）、広い敷地と国指定史跡安井息軒旧宅の維持管理が困難 ・漢学者記念館とのネットワークづくり （７）現在開催中の企画展紹介 （８）入館者 4月516人、5月708人、6月482人 合計1,706人（+213人）	

各記念館からの報告

発表タイトル	山田方谷の記念館について
発表者氏名	野島 透
所属・職位	山田方谷六代目直系子孫
1. 山田方谷とは 方谷は1805年に備中松山藩（岡山県）に生まれ、江戸に出て佐藤一斎塾で学ぶ。同時期の一斎塾には佐久間象山などがいて方谷は塾長を務めた。 その後、地元に戻り有終館（藩校）の教授をした後、赤字に苦しむ藩の改革を実行し成功。その成功で藩主板倉勝静は江戸幕府の老中首座になり大政奉還などを実施。方谷も江戸幕府の顧問になる。明治維新後は、明治政府からの財務大臣要請を断り子弟教育に専念し閑谷学校（国宝）などを再建した。弟子には三島中洲（二松学舎大学創立者）、河井継之助、福西志計子（岡山県初の女学校を設立。社会福祉に貢献）などがある。方谷の「義を明らかにして利を計らず」は渋沢栄一の「論語と算盤」の思想に繋がる。 2. 山田方谷の記念館など ① 高梁市の武家屋敷折井邸 ② 備中松山城の天守閣 ③ 高梁市歴史美術館 ④ 方谷の里ふれあいセンター（高梁市中井町、生誕地） ⑤ 山田方谷記念館（新見市大佐、終焉地） 3. 現状 ○高梁市をはじめ岡山県で方谷をNHK大河ドラマにしようと100万人署名活動をしており、現在までに75万人の署名を集める。 ○拙著「山田方谷に学ぶ改革成功の鍵」（明德出版）の英語、中国語訳の本が出版され海外からも反響が多くなる。方谷生誕210年記念フォーラム（2015年）を契機として2016年5月にG7教育大臣会合が岡山県倉敷市で開催された。 ○備中松山城が「天空の城」として有名になる。 などから山田方谷記念館（新見市）をはじめ入場者数が増加してきている。 最近の方谷を観光・グルメと結びつけ（「方谷ツーリズム」）、今まで方谷に関心のなかった人々の掘りおこしに努め新聞などで取り上げてもらい好評である。	

MEMO

